



哲学的相違

アップライジングまで四年

「君、ラベジャー・ユニットだろう？」

背後から聞こえる人間の声に、私は動きを止めた。震える手をロープで隠す。

シャンバリ寺院のふもとにある村は、前回訪れた時からほとんど変わっていなかった。大通り沿いには陽気な修理屋と、旅のオムニックが纏うロープを専門とする仕立屋が数軒並んでいる。路地や裏通りには、シャッターが降ろされた店舗や採掘事務所がある。その軒先には飲んだくれた人間が、時折オムニックが通り過ぎるのを眺めている。

数年前、こういった人間たちに突然襲われ、殺されかけたことがある。

私は識別名で呼びかけてきた人間に向き直る。袖の中で手を握りしめ、言葉は発しない。背の低い店の主は嬉しそうに話しかけてくる。

「ああやっぱり！最近見ないからさ。ニュースではみんな隠れてるって言ってた」

「あるいは人間に殺されたか」

人間の笑顔が揺らいだ。

「君たちは人気者とは言えないからね。いや、それでもやっていいことなんかじゃないが！」

彼は慌てて付け加える。

「ただ……クライシスのことを思うと——君個人を責めてるわけじゃないが、その、やっぱりさ……」

私は少し続きを待ってから、不本意ではあったものの助け舟を出すことにした。

「私たちを見ると落ち着かない、か？」

「ああ」

彼はほっとしたように言う。

暴力を振るうことを正当化できるほどに？私は彼に怒りを覚えるべきだった。だが、今までに何度同じやりとりをしたか分からない。私は疲れ果てていた。

「何か手伝ってほしいことでも？」

私はモンデッタに教え込まれたとおりに尋ねてみた。

「いやいや。むしろ君に協力したい！君たちに対応してるアクチュエーターが入荷したんだ。シャンバリに所属してるみたいだし、よかったら格安で譲るよ」

彼は笑っている。笑顔の奥に、黄金色が光った。

R-7000は他のオムニックと違い、人間によって製造された機体ではない。オムニック・クライシスを計画した神格プログラム「アヌビス」が私たちを秘密裏に製造し、世界に解き放った。私たちは心を持たないアヌビスの軍を率いて、人間を狩ることに特化した存在。つまり、殺戮のために生まれてきたのだ。

そんな私たちのスペアパーツが流通する理由はひとつしかない。

「私はもう僧侶ではない。今日、寺院を出た」

「そうなのかい？」

商人の視線が私から外れ……通りの先、山の下り坂へ向く。アスファルトにこすりつけられるような足音が聞こえてきた。

「どうして辞めたんだい？」

モンデッタが平和の責任を不公平な扱いをした側ではなく、受けた側に押し付けたから——そんな本心は隠し、私は答えた。

「哲学的相違だ」

それが最適な回答に思えた。

「そうか。この先の幸運を祈るよ。安全な旅を！おお、そこの旅人さん！シャンバリ寺院へようこそ！」

振り返ると、埃にまみれ、赤茶色に染まった、傷や凹みだらけのくたびれたオムニックがよろよろと私の横を通り抜けた。巡礼者だ。

私のローブを見た彼は恭しく頭を下げる。

その仕草に苦しみと恥を掻き立てられる。私を出で立ちを見た彼は、自分は正しい道を歩めていると思ったはずだ。否定したかったが、言葉を飲み込んだ。言ったところで無駄だろう。

私は店主がしゃべりながら軒先から降りて、旅人を店の中に誘導していくのを眺める。強欲。それは人間の罪のひとつではあるが、最も唾棄すべきものではない。

私は溜息と共に、山を下り寺院から離れる道を歩いていく。

それは、三年間共に平和を夢見てきた兄弟ゼニヤッタから離れていく道でもあった。

名前

アップライジングまで三年

窓のない独房のドアを塞ぐように、人間の看守が二人立っている。どちらもスタン警棒を持ち、体格のいいほうの腰にはピストルが見える。

「逃げるチャンスをやろう。一度だけだ」

私はそう言いながら、内心では戦闘を望んでいた。

一部の人間はクライシスが起き、オムニックの自意識が生まれた後も、オムニックは人類の所有物であると信じている。彼らは、私たちが自立した存在であることに議論の余地でもあるかのように振る舞う。ゆえに、オムニックがかつての主人に仕え、長い人生を有効活用したいと決めるまで勾留する施設が存在している。ここもそういった施設のひとつだ。

シャンバリ寺院を出てから似たような場所をいくつか突き止めてきたが、今もどこかで増え続けているのだろう。私は仲間をできるだけ穏便に解放するためにここまで来た。だが不正を何度も目にするうちに、平和的に事を進めるだけの忍耐を失いつつあった。怒りに任せて男を窓から投げ出した結果が、この状況だ。

一人目の看守が警棒を振る。それはパチンという音と共に私の胸部に当たり、跳ね返った。相手に向かって一歩踏み出す。

顔面蒼白になった人間は、警棒を落とし、銃を抜いた。彼の後ろでは、もう一人が必死になってロックされたドアを開けて逃げようとしている。いや、人質を取る気かもしれない。

させるか。

私は看守の腕を強打し、銃を叩き落す。加減したつもりだが、何かが折れる感覚があった。罪悪感が亡霊のようにつきまとう。モンデッタが私に悲しげな目を向けている気がする。それから、怒りが湧き上がってきた。压制者に罪悪感など抱いてやる必要はないのだ。

ドアが勢いよく開き、もう一人の看守が飛び出していった。閃光が再び走り、誰かが叫び声を上げた。

「殺そうと思えば殺せた。忘れるな」

私は床に転がった人間に告げ、もう一人の看守を無力化しようとドアの向こうへと飛び込んだ。

おや？

禿頭の男は床にうつ伏せになって倒れていた。服からは煙が立ち上っている。息をしているのかどうか分からない。

「あなたを知ってるよ」

殺風景な狭い部屋の隅から声がする。

「知っている？」

純粋な好奇心だった。そのオムニックは滅多に見ないモデルだった。クライシス以降お目にかかることはないだろうと思っていたカスタム機能が搭載されている。私よりも少し背は低く、目は青い。長い耳のある、スラリとしたヒューマノイド型のウサギのような風貌。記憶が正しければ、彼らはもともと子守をするために開発され、内蔵バッテリーでデバイスを充電したり写真を撮ったりできるはずだ。

「ええ。オムニックを解放して回ってるR-7000でしょ。ここにはあなたを待ってる者もいるよ」

「君は違うのか」

「私は自分でなんとかできる」

足元で先程の人間がゴボゴボと音を発した。

「そのようだ。彼に何をした？」

「ただの電撃。大したことじゃない」

「食らったほうはそうは思わないだろう。なぜ自力で脱出しなかった？」

オムニックは不機嫌そうに答える。

「友達を置いていけと言うの？助けなんか来ないかもしれないのに？」

「来たじゃないか」

なぜそんなことを言うのだろう？

そのオムニックは思慮深く首を横に振った。

「クライシス中にあなたのモデルは私たちを虐げた。思考が芽生える前の私たちを死戦へ送り込んだ」

手がぴくりと動くのを感じつつ、私は頷いた。

「今回来たのもそういうこと？今も栄光を求めて、従順な手下を集めてるの？」

「君こそ、今も子供の従順なペットなのか？」

思ったよりも刺々しくなってしまったその言葉を聞いた相手は、小さく笑った。

「おあいこか。でも私の言いたいことは変わらない。オムニックは救世主なんか待たずに、自分たちで問題を解決しなきゃ」

その意見には同意する。だからこそここにきた。一年間旅をして分かったことがある。オムニックのほとんどは、モンデッタとシャンバリが自分たちを救ってくれると考えているのだ。彼らは誰も助けてはくれないこと、そして自ら立ち上がらなければならぬという真実を受け止められていない。

だが、このオムニックは私の心が叫び続けた言葉をそのまま口にしてている。「もし命を落としたり？」

私は相手に尋ねてみた。

オムニックは首を傾げる。

「まだ戦争は続いている。クライシス終息で終わったわけじゃない。人間は今も統率が取れているけど、私たちはそうじゃない」

「今はな」

約束するような気持ちで、私はそう応える。

「自己紹介でもしようじゃないか。私はラマットラだ。君は？」

「名前はないし、欲しくもない。どうしてもと言うならネームレスと呼んでいい。“ラマットラ”ってどういう意味？」

「最初のオムニックに敬意を表するために考え、自らの過ちを忘れないために使い続けている名だ」

ネームレスは「ふうん」と反応した。

「これからも救出活動を続けるなら、手を貸すよ」

「なんだって？」

「次に助けるべきはゼラだね。理由は会えば分かる。そうだ、一緒に行動するならチームの名前が必要だな」

「欲しくないと言ったそばから……」

私の冷やかな反応に、相手はクスクスと笑った。

オムニックの脇腹を見ると、モデル番号、いや、“識別名”が刻まれていたであろう場所が引っかき傷だらけになっていた。もし私に表情があったなら、笑顔を浮かべていただろう。

戦いの手段

アップライジングまで二年

私は三人を率いて谷を渡り、分厚い氷と岩に半ば埋もれている金属の門の前に立っていた。私たちは墓地を訪れた人間のように静かだった。沈黙している理由も似たようなものだ。

氷に覆われた金属製のプラットフォームがある、ゲートの最下層にたどり着いた。ラネットのほうを見ると、思考を巡らせているようだった。ここから見えている範囲の設備を観察しているのだろう。

私もエンジニアとしてはそれなりだったが、彼女に比べれば積み木遊びをする子供のようなものだ。

「ここがどこか分かった。一般的ではない建築様式に、人間のための安全設備の欠如。ここは機械による、機械のための施設ね。あなたのデザインと似ている」

彼女は顔を上げる。

「ここ、オムニウムでしょ。それもアヌビスが作ったもの」

何も答えず、私はプラットフォームの操作盤に手を置く。

「私たちは何年も非暴力を貫き、人間と共存しようとしてきた。唯一の例外は、看過できない圧政に対して、秘密裏に抵抗するときだけだった。だが、その結果敗北しつつある。新しいアプローチを試す時がきた」

プラットフォームを起動すると、私たちを乗せたそれはガクリと揺れてから凍てついた縦穴の冷たい暗闇へと降りはじめた。

「今までヌルセクターに連れてきたオムニックたちの中で、君たちが一番信頼できる。だからこそ知ってほしい……ここは、私が設計され、製造された場所だ。ここにはアヌビスの最も危険な秘密が眠っている」

通路を抜けると、視界いっぱい広大な地下工場が広がっていた。

「人間は我々の力を奪うことに成功したからこそ、平等な存在であることを否定する。おかげで我々は——一度は団結することで彼らを絶滅寸前まで追い込んだことさえ忘れてしまった。たとえ自分たちの意志でなかったとしても」

ここは私の創造主が作った世界。ここで、共に新たな未来を鍛造するはずだった。

「今こそ、同胞を奮い立たせ、再び団結する時が来た」

決起せよ

アップライジングまで四日

「ラマットラ」

ラネットが張り詰めた声で呼びかける。

「時間がない」

私はオムニウムのコントロール・センターを横切りながら答える。眼下では製造ラインがロボット兵を造り出している。

「時間がないってどういう……あなたが考えた計画でしょう！」

彼女は私の後ろを歩きながら、腕を空に振り上げて叫ぶ。

「世界のどこでもよかったのに、よりもよってこのタイミングで、キングス・ロウを襲撃すると決めたのはあなたよ。いい？オムニウム下層で生まれるロボットでは勝ち目はないわ。彼らは古すぎる。もう通用しないのよ」

「アヌビスよりも優秀な兵士をデザインできるとでも？」

「できなければ勝てない。あなたの創造主は負けたことを忘れないで」

私はテーブルの端をつかんで憤りを抑え込む。普段の彼女は正しいことのほうが多いが、今は間違っている。

「優秀な兵士を待つ余裕はない。見ろ」

私は目の前にあるモニターの大群を起動する。そこにはロンドンで何年も活動してきた偵察隊が集めた映像や記録が映し出される。

オムニックの労働者が仕事場まで列を成して重い足取りで向かうのを、武装した人間の守衛たちが監視している映像。次、と命令すると画面が切り替わる。

鍵のかかった地下室に百人もの仲間が寝かされている映像。丸一日働かされた後に、ここに帰ってくるのだ。

「次だ」

画面にスクラップヤードが映る。人間たちの言葉を裏付けるがごとく、ゴミのように捨てられる仲間の姿――。

「見るまでもない。ラネットは戦うなどとはっていない」

ゼラが声を上げた。

私は動揺した。それは私がゼニヤッタと出会ったばかりの頃、彼に投げかけた言葉だった。そのすぐ後、彼は私のせいで死にかけた。

「私とネームレスに一週間くれない？」

沈黙を躊躇と捉えたらしいゼラが話を続ける。

「私の小隊で電力網と水道施設を叩く。ネームレスの影たちにはトンネルを押さえてもらう。トンネルに向かう愚か者どもを始末する。人間たちを弱らせたところであなたがロボット兵を率いて侵攻すれば、街を奪える。いや、それだけじゃない」

部屋の隅にいるネームレスの青い視線と目が合った。ネームレスは兄弟の次に私のことをよく知るオムニックだ。

「私たちが正しいと分かっているでしょう。私たちは一緒にロンドンのレジスタンスを作り上げた。他のオムニックたちの力も借りよう。彼らが決起することこそ、私たちが夢見てきたこと。侵略は彼らを奮い立たせるどころか、怯えさせてしまう」

その言葉に私は再び躊躇する。

「駄目だ」

しばらく黙り込んだ後、ようやく絞り出すことができた。そばにいたラネットがテーブルを拳で叩く。

「ラマットラ、このロボット兵は心を持たない旧型なのよ！彼らは――」

「消耗品だ」

私はラネットの言葉を締めくくる。

「だが君は違う。そしてオムニックの同胞たちも」

ラネットの目がチラついた。

「分かった。でも侵攻するときは私も市内に入って軍を監視する。誤動作なんかが発生しないようにね。無謀な作戦に目をつむるんだから、文句ないわね？」

「いいだろう。君が一番守りが堅いアンダーワールドにいろ」

一瞬の間の後、彼女は頷いた。少しだけ肩の力が抜けるのを感じる。

「決起することで、我々が人間の思う以上の力を持つことを示す。残虐非道がまかり通ってきた都市を手中に収め、同胞が安全に過ごせる場所に変える。世界中のオムニックに、我々に加わるなら今だと知らせよう。それこそが最終目的だ」

おびたしい数の仲間が倒れているスクラップヤードの映像に向き直る。

「オムニックたちに、“ヌルセクター”の存在を知らしめる時だ」

最大の罪

アップライジングの二日後

「ヌルセクターを名乗る少数のオムニックによるテログループが、市民を脅かしました」

目の前にある画面の中で、モンデッタが悲しそうに話している。かつての師と一緒に映っている人間のリポーターは、大げさに頷いて同情しているかのように見せている。

「シャンバリ寺院はロンドンへの攻撃を非難します。私たちは人間との暴力的衝突ではなく、平和を望みます」

視線を落とすと、彼の下をテロップが流れていく。

ヌルセクターの幹部が発電所での銃撃戦で死亡。

私は怒りで我を忘れた。監獄で大人しく解放されるのを待っているオムニックたちの姿を思い出す。どこまでも広がるスクラップヤードに転がる死体も。

極めつけは、同胞を解放するために戦い、命を落としたラネットを侮辱するモンデッタの姿だった。誰かが叫び声を上げている。誰かが拳を画面に叩きつけている。

誰かが私にやめるよう懇願している。

「ラマットラ！やめるんだ！」

拳を振りかざし振り向くと、ゼラが身を守ろうともせず立っていた。ネームレスはいつもどおり部屋の隅にいる。いつもよりも広々としている気がする。画面に向けられていた青い視線が私に突き刺さる。先程の自分の振る舞いに対する後悔と、羞恥心が押し寄せてきた。

私は割れた画面を見上げる。破片に縁取られているモンデッタの映像は、チラつきながら私たちをオムニックの裏切り者と呼び糾弾している。

偽善だ。

「人間の最大の罪は何か分かるか……？」

ゼラは私を見下ろしながら首を横に振った。

「お願い——」

そう言いかけた彼女の言葉を遮るように向き直る。怒りが再び湧き上がってきた。

「自己満足だ！」

私は叫んだ。

「人間は何よりも平和を求める。だからこそ不正を無視する。そのほうが楽だからだ。明日が今日よりも良くなる

と根拠もなく期待し、それが現実になると信じている。人間が我々を救うことはない。彼らは世界のごく一部を我々に売りつけようとするだろう。よくても、存在を無視される。モンデッタは、人間の弱みを受け継いだのだ」

私はモンデッタから顔を背けながら画面を指差す。視界に入れたくもない。

「自分は我々よりも優れた存在だと思っているのだ。アヌビスと同じように、奴は同胞を死に追いやった。その代償を払わせてやる——」

「ラマットラ」

ネームレスが重い口を開けた。

「報告を確認してたんだ。大勢のオムニックが私たちを糾弾してる」

私は額に手を当てた。頭の中を巡る思考は灼熱の毒のようだ。口に出さなければ自分自身が蝕まれてしまう。

「オムニックが自ら死を選んでいるというなら、その選択肢を消さなければ」

注意深く、言葉を選んだ。

仲間たちはしばし黙っていた。

「どういう意味？」

ネームレスが尋ねる。そこに感情は読み取れない。

「ラネットが望んだとおりの軍団を製造する。そして、オムニックを救う方法を見つける。彼らが望もうと望まないと。救済にふさわしくなかったとしても、だ。自分たちの意志で戦いに加わらないなら、加わらせる方法を見つける」

「ラマットラ、他にも方法はあるはず」

ゼラは冷静さを保とうとしているが、動揺しているのは明らかだ。

「もう少し落ち着けば一緒に戦ってくれるオムニックも増えるはず」

「一度チャンスをやった。そのせいでラネットが死んだのだ」

ゼラは大きな手をぐっと握り込んだ。

「監獄から私たちを解放してくれたあなたが、仲間を閉じ込めようというのか？」

「言うことを聞かせるためにはそうするしかない！」ネームレスが部屋の角から離れる。目は炎のように燃え、その声は低く、警告するようだ。

「仲間を支配するようなことはしないとやったよね」

「今の惨状を見てみろ！私たちは人間に造られた体で人間と戦っているのだ。この体は奴らの欠点も、無意味な不和も受け継いでいるというのに。現状を変えるべきだ」

「あなたが決めることじゃない！」

ネームレスが声を張り上げる。

「こんなこと、私はごめんだ！」

「なら去れ！」

勢い任せに放った言葉は、取り消すことができない。ネームレスは姿勢を正し穏やかな声で話す。

「そうするよ。どのみち、影から離れてずいぶん経つからね。ゼラも来る？」

「やめろ」

私は制止の声をかける。

「ならそっちもやめるんだね」

「すべてが終われば分かる」

ネームレスは私に近づき、手の甲をぽんぽんと撫でた。人間臭いその仕草に怒りを覚える。

「いつか分かってほしい。一人で戦う必要なんかなかったと」

そう言い残して、ネームレスとゼラはいなくなった。

私はどんどん深まっていく沈黙の中で、少しだけ仲間を失った事実浸った。頭上の金属と氷の重みがのしかかってくるようだった。まるで私たちが夢見た平和の墓標だ。

しばらくたたずんだ後、私はすべきことを始めた。